

ピンカー-tonの人柄

人間総合理工学科 4年 14DC10--- Y. E.

「蝶々夫人」を通してのピンカー-tonの印象はただただ「酷い男」である。世界中の港で女を作っては捨てており、蝶々さんも現地妻として初めから騙し、捨てる気で結婚をした。日本を離れた後も三年間全く戻って来ることなく、また蝶々さんへの連絡も無かった。ようやく戻ってきたと思いきや、アメリカで結婚した正式な妻を連れてきており、子供がいると聞くと「子供を引き取る」という意向だけ言って蝶々さんと再会せず去っていく。これらの行動からはピンカー-tonの良い部分が全く伝わってこない。しかし本当にピンカー-tonは「酷い男」なのだろうか。当時の日本やアメリカの風土、ピンカー-ton本人の視点などを考えてピンカー-tonの人柄を推測してみる。

まず、オペラを鑑賞して解るピンカー-tonの性格を考えてみる。第一幕ではピンカー-tonが自由気ままな性格をしていると思わせられた。安っぽいと感じていた日本家屋の変化する様を見て喜ぶところや、シャープレスの忠言を飄々と受け流す態度、蝶々さんが絶縁された時に蝶々さんを励まし、元気づける姿から、○ピンカー-tonは自分の気持ちにとっても素直に行動していると考えられる。

第三幕では家まで来るも、スズキに蝶々さんの現状を聞くと、子供を引き取るとをスズキに言い、蝶々さんに会わずに去ってしまう。この部分からは薄情な性格というより、自分が犯した責任を取るつもりではいるが、○自分の罪としっかり向き合っておらず、逃げている印象を抱く。これらからピンカー-tonは自由気ままに責任感無く、軽薄で他人頼りの人物であるとみられる。

次にピンカー-tonの立場、生い立ちから考えてみる。アメリカはピューリタンの国であり、物語の時代は現在よりも傾向が強かったと思われる。海軍中尉の立場であるピンカー-tonも謹厳実直、清廉潔白を重んじる風土、家庭で育ってきたと考えることができる。しかし○劇中でそのような人柄を感じないのはアメリカでの人種差別の背景があるからだとは私は考える。物語の時代では、現在でも度々問題になっている人種差別が激しい時代であった。アジア系に対する人種差別は1900年前後の、排華移民法（後に排日移民法も制定される）の制定や黄禍論から推察できる。日露戦争で日本が勝利した後、アメリカやヨーロッパの国々が日本を脅威とみなし排しようとしたことから、それまでアジア系の人種を対等ではなく劣等人種として見なしていたことがわかる。そのため○ピューリタンとしての態度やモラルは白人のみに向けられていたのではないかと思われる。ピンカー-tonは蝶々さんの容姿に満足していたが、あくまで黄色人種の中での感想であり、さらに女衞で人身売買を生業としていたゴローの紹介とあって、蝶々さんはただの娼婦として見られていたと考えられる。当時のピンカー-tonの気持ちを現代視点で考えてみると、気軽に一回の契約で風俗（ピンカー-tonにとって蝶々夫人との結婚は、いつでも自由に切れる契約のものであり、ピンカー-tonを全く縛らない契約だった。）に行ったが、相手の女性はずっと愛されていると妄信しており、三年後知らない間に子供ができています。正式な妻がいる立場でありながら子供を引き取るという重大な決断を下したが、相手の女性は自殺してしまう、という風に捉えることができるのではないかと思う。もちろん蝶々夫人にとって、ピンカー-tonとの結婚は正式な契約のものであり、人生を左右するとても重大な出来事であっ

た。しかし当時のピンカートンの視点や立場で考えると、本人からしてみれば物語の結末はまさに晴天の霹靂であったと思われる。彼が最後に蝶々さんに会わなかったことの原因として、後ろめたさもあったと思われるが、私は愛されているという妄信をし続けていた蝶々さんに恐怖を感じたのではないかと考える。

これらのことから、ピンカートンは決して悪い人柄ではないと思われる。もちろん娼婦を買うことを私は良くは思わない。しかし当時のピンカートンの立場や時代背景を考えると、物語の結末は、当時の文化の違いから起こる不幸が重なった悲劇であり、けっしてピンカートンだけが悪いというわけではないと考える。